

## 2017年夏 留学報告書

2017年6月28日

London School of Economics/CEP

武田 航平

ロンドンでは日が長い夏を迎えて、一年の中で一番過ごしやすい時期になっています。大学そばの公園では、日光浴(日向ぼっこ)を楽しむ人々がたくさん見られるようになって来ました。

### 1. LSE2年目

LSEの二年目は2つの専門科目(フィールド科目)と2年目の論文を提出することが必要になります。アメリカの大学との大きな違いは、専門科目の試験がすべて筆記試験で、口頭試験の類は一切ないことでしょう。5月中旬に集中して行われる試験の結果と論文の点数を合わせて、3年目への進級(正式に PhD コースとなる<sup>1</sup>)が決まります。

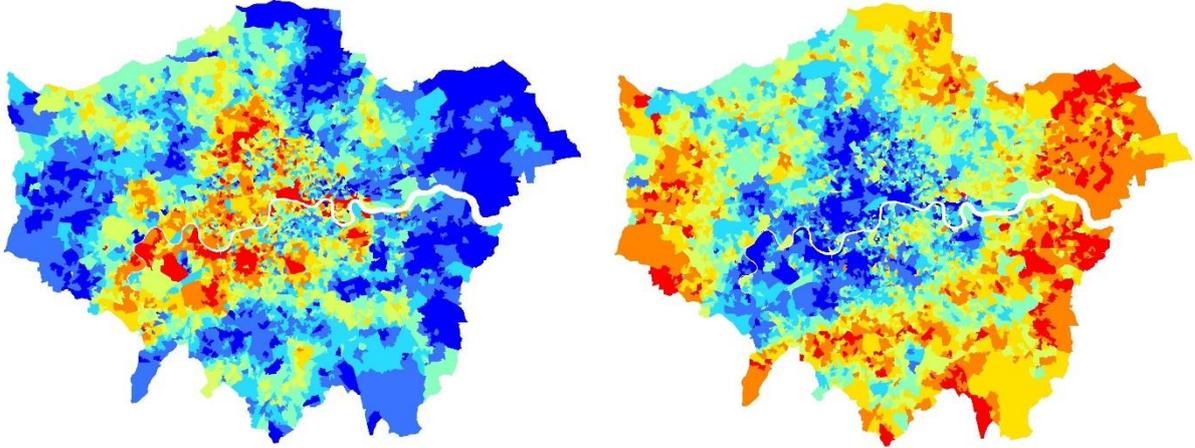
前回のレポートでも少し触れましたが、僕はフィールド科目として国際経済学と労働経済学の2つを選択しました。後期(2017年1月-3月)の内容は、シラバスを見る限り僕の関心からは離れているようでしたが、実際に個性的な教授陣の講義を通じて色々な論文を読んでも案外面白いものも多かったです。特に、後期の国際経済学は、基本的な小国開放経済のモデルから始めて、為替レートの決定、ソブリンリスク(特に新興国市場における信用リスク)、資本流動性制約、国際金融市場における投資の決定など、いわゆる国際金融論(国際マクロ経済学)と呼ばれるトピックをカバーしました。実はこのあたりの内容を真面目に勉強するのは、学部時代以来だったので、当然のことながら最近の研究動向などは追っておらず、講義で出てくる内容は非常に新鮮に感じられました。僕の専門は、国際経済学の中なかでも国際貿易論の方で、こちらは個々の企業レベルの意思決定から議論を進めていく、ミクロ経済学の応用分野なので、一言に国際経済学と言っても、議論の対象が違えば当然アプローチの仕方も全く異なります。最新の研究では、マクロ、ミクロ両方からの統合した議論を目標とした(であろう)ものが少しずつ現れてきているので、それらの流れもしっかり見極めていく必要があります。

さて、もう一つ、2年目の論文は、LSEで初めて書く論文になります。時間の制約もあるため、日本の修士論文にあたるようなものですが、指導教官と定期的にミーティングしながら書き進めていきました。テーマとしては、都市における住み分け(sorting)とジェントリフィケーションに関する理論モデルの構築に取り組みました。大都市では、スキル、所得の階層によって住む場所が大きく異なります。例えば、下の2つの図は、ロンドンにおける異なる教育水準をもつ人の居住密度を表してい

---

<sup>1</sup> LSEの博士課程は正式には MRes/PhD コースと呼ばれ、5年一貫ですが最初2年は MRes コース、後半3年は PhD コースと分けられています。

ます。左の図は教育水準の高い人、右の図は教育水準の低い人の居住密度を表しており、赤い部分が密度の高いロケーションになります<sup>2</sup>。



この地図からも明らかなように、都市内においては異なる所得、スキルの家計は明示的な住み分けパターンを示しており、再開発やインフラストラクチャーの整備(例えばロンドンだと、2018年開通予定のエリザベス線など)といった局所的な政策(place based policy)の影響を議論する際には、この住み分けパターンが自己組織的に生まれるメカニズムを理解することが重要になってきます<sup>3</sup>。そこで、異質的な主体の居住選択および通勤を取り入れた空間一般均衡モデルに基づき、定量的に政策を評価するための下地となるフレームワークの構築を行いました。時間的制約もあり、二年目の論文としては、均衡の挙動についての理論までしか議論できませんでしたが、今後、データとあわせてシミュレーションにも取り組んで生きたいと考えています。

先日、試験および論文の成績も発表され、いずれも合格ということで、問題なく正式の PhD コースに進級ということになりました。これで、晴れて試験からも解放されるか、と思いきや、僕の入学した年から3年目にもフィールド科目を追加で一つ履修しなければならなくなったということで、来年も研究に加えて授業が続くことになります。まあ、幅広く知識を身につけることは決して悪いことではないでしょうが試験勉強に費やす時間等を考えると、どうなのでしょう。

## 2. 夏季休暇

6月頭から9月まで、大学は長い休暇期間に入ります。一部、サマースクールの授業をする PhD の学生もいますが、同期もそれぞれの国に帰っておりオフィスも少し閑散としています。僕は、この夏、リサーチアシスタントの仕事と、ターム中にはあまり進められなかった自分の研究を進めたいと思っています。一つは、日本のデータを使った経済集積と交通インフラストラクチャーの研

<sup>2</sup> 教育水準とは、センサス(国勢調査)における qualification の階層分けに従い、それぞれの図は一番低い qualification のグループと、一番高い qualification のグループを表しています。

<sup>3</sup> この現象(sorting)は、異なる空間レベル(地域、国)でも観察されます。

究、そしてもう一つは、南米の都市における犯罪に関する研究です。後者は、同期と始めたばかりの研究ですが、データの特異性も含めてなかなかポテンシャルがありそうなプロジェクトなので着実に進めていきたいと考えています。あとは、ターム中に追っていけなかった最近の研究の潮流を把握していくことも、タスクの一つです。

ところで、先週はパリで開かれた、都市経済学のサマースクールに参加してきました。都市経済学およびその周辺分野(経済地理学、開発経済学、国際貿易)を専攻している同世代の PhD の学生が集まり、3 日間、午前中は講義、午後は学生発表というスタイルで交流を深めることを目的としているものです。この分野は、経済学の他分野に比べて、そこまでメジャーではないので他の学生と研究を通じて知り合うことができたのは大きかったです。また、インフォーマルな会話の中から参加していた教授陣の思想<sup>4</sup>も垣間見ることができ、その点、参加してよかったと思います。僕は、初めてのパリということもあり、少し浮かれて観光もしました。

ロンドンでの二年目も終わり、ようやく研究がメインの段階に移行しつつある夏ですが、この環境をより活かして楽しめるよう益々精進していきたいと思っています。



サマースクールの集合写真@パリ(筆者は前列中央右)

<sup>4</sup> ここで言う思想とは、例えば、モデル選択に対する考え方や特定のアプローチに対する批判的考え方、くらの意味です。